

論説

秦・漢時代地方行政における意思決定過程

高村 武幸

はじめに

戦国期から本格的に始まったとされる中国の官僚機構による統治と行政は、様々な各官府による膨大な公文書や公的簿籍の作成と、その送受信により成立した。いわゆる文書行政と称されるものである。<sup>(1)</sup> この行政を支えた公文書・公的簿籍は、二〇世紀から簡牘史料の形で陸続と発見された。また文書行政の制度的基盤を検討するための史料として、睡虎地秦簡・張家山漢簡など律令・法制関連の簡牘史料も重要である。<sup>(2)</sup> これらを用い、中国古代における行政の実態を検討した研究が蓄積されてきた。

簡牘史料を用いた行政の研究として、まず永田英正氏の研究を掲げる必要がある。<sup>(3)</sup> その詳細については簡牘の研究史に譲るが、最も重要な点は漢の行政運営の根幹の一つである「上計」の実像を明らかにしたところにある。<sup>(4)</sup> 逆

に大庭脩氏は、同じく居延漢簡中の「元康五年詔書冊」の復元と検討を通じて、中央政府からの命令が行政機構の最末端までどのように届くのかを解明した<sup>(5)</sup>。また紙屋正和氏は、典籍文献史料と簡牘史料とを併用し、漢代の地方行政機構とそこに勤務する官吏の姿を、中央政府の動向も視野に入れつつ動態的に明らかにした<sup>(6)</sup>。他、国内だけでも行政関連の研究は非常に多い<sup>(7)</sup>。

ところで、先行研究の多くでは、基本的に行政における「決定事項」を扱うこととなっているように思われる。大庭氏が復原した「元康五年詔書冊」では、中央で決定した祭祀に関する「決定事項」が、どのように伝達されたかがわかる。また、簿籍についても、某官吏ないし某官府で、一定の期間やある時点での状況を記録または記録を整理したものを報告しているのであり、簿籍を送付しての報告の段階で判明した事柄、これも一種の「決定事項」といえるだろう。「元康五年詔書冊」からは、中央政府内部での意思決定過程も判明しているが、詔書以外の公文書において、命令または報告されている「決定事項」が、どのようにして決定されたのか、という意思決定過程が判明するものはほとんどない。以下に居延漢簡の地方監察に関わる内容のものを例として掲げてみたい<sup>(8)</sup>。

地節二年六月辛卯朔丁巳肩水候房謂候長光官以姑臧所移卒被兵本籍為行辺兵丞相史王卿治卒被兵以校閼亭隧卒被兵皆多冒乱不相応或

易処不如本籍今写所治亭別被兵籍并編移書到光以籍閼具卒兵兵即不応籍更実定此籍随兵所在亭各実努力石射歩数

令可知齋事詣官会月廿八日夕須以集為丞相史王卿治事課後不如会日者致案毋忽如律令

地節二年（前六八）六月二十六日、肩水候の房が候長の光に通達する。候官は姑臧から送られてきた卒被兵本籍により辺塞武器調査をする。丞相史の王どのが卒の所持武器を査察し、亭燧を査閲されるが、卒の所持武器は多くがさまざまな管理状態にあり、中には場所が違い本籍通りではないものもある。今、亭別の被兵籍を写して併せて送るので、書が到着したら光は籍を用いて卒の武器を査閲し、籍と合致していなければ、あらためて実態に依じて定め、この籍に従って武器のある亭でそれぞれ弩の張力と射程距離の実態がわかるようにしたものを持参し、今月二八日夕方に候官へ出頭し、みな丞相史王どのが監査のため集合せよ。遅れて期日どおりにならぬ者は案を送れ。ゆるがせにしてはならない。律令の如くせよ。

(7.7A.A33, 形状〇三甲／機能〇一丙)

これは張掖郡の辺境防衛機構の肩水候官が、査察を前に兵器簿籍の一斉点検を隷下各部署に命じたものだが、この命令を出す判断に至るまでの過程は不明である。

中央政府であれば、先の「元康五年詔書冊」のような事例の他、典籍文献史料にみえる「集議」の重要性を指摘する考察を踏まえると、それが意思決定に重要な役割を果たしたことが考えられる。しかし地方官府の場合、根本史料となる公文書が主に「決定事項」の伝達に用いられることに加え、中央政府や上級機関の命令に基づいた行政運営も多く、地方行政の場で行なわれる意思決定過程がどのようなものか、不明確な部分も多い。

そこで本稿では、郡県を中心に、秦漢時代の地方官府でどのようにして地方行政上の意思決定がなされるのか、またその際には文書が用いられるのか、用いられるとすればどのような文書か、そうした状況が生ずるにはどのような背景があったのかを考えてみたい。併せて、地方行政における「集議」に類する行為の有無やその意味につい

でも論及したい。なお、本稿では簡牘史料の形状と性格、行論中の「文書」「公文書」「書信」といった語句の定義は以前の拙稿に示した分類に依拠し、逐一の解説はしていない。<sup>10)</sup>

### 一、県行政における独自の意思決定事例とルーティンワーク事例について

まず、地方行政における意思決定過程を議論する前に、地方官府がどの程度その官府としての判断で意思を形成・決定していたのか、考えたい。先にも触れたように、公文書をみる限りでは、中央政府や上級機関の命令に基づいた行政運営や、ルーティンワークに類する行政実務に関する公文書が多いように思われる。そこで、統一期の秦の遷陵県が廃棄した公文書・簿籍を中心とする里耶秦簡を例に、以前別稿で作成した公文書集成を改変し、郡・県・諸官府の独自の判断で意思決定を行なった事例と、ルーティンワークや上級機関の指示に基づく事例とを集成・検討する。これにより、地方行政の中でルーティンワーク等が占める割合を考察でき、また郡・県・諸官府の独自の意思決定がなされる行政事項はどのような内容が多いのかなど、有益な手がかりが引き出せる。

作業としてはまず、里耶秦簡の公文書の内容を、A…独自の意思決定事例・B…各機関の責任者の裁量権による判断が入るものの、定期的に同様の事例を処理していると推定されるなど、半ばルーティンワーク化している可能性がある事例・C…他機関等の命令・依頼や完全なルーティンワークで、当該機関の裁量権による意思決定の必要があまりない事例とに分類する。以下にそれぞれの事例に該当する実際の公文書を例示する。

卅二年正月戊寅朔甲午啓陵郷夫敢言之成里典啓陵

郵人欽除士五成里勾成成為典勾為郵人謁令

尉以從事敢言之(正面)

正月戊寅朔丁酉遷陵丞昌卻之啓陵廿七戸已有一典今有除成為典何律令

応尉已除成勾為啓陵郵人其以律令／氣手／正月戊戌日中守府快行

正月丁酉旦食時隸妾冉以來／欣発 壬手(背面)

始皇三二(前二五)年正月一七日、啓陵郷の夫、申し上げます。成里の典・啓陵の郵人が欠員となりました。士五で成里の勾と成を除任し、成を典、勾を郵人にすべく、尉に指示して從事させて下さるようお願いいたします。以上申し上げます。正月二〇日、遷陵丞の昌、この件を却下する。啓陵の二七戸にはすでに典が一人いる。今また成を典に除任するのはどのような律令に應じてか。尉はすでに成と勾を除任して啓陵郵人とした。律令によるように。氣手。正月二一日の日中、守府の快が持つて行った。正月二〇日の旦食時、隸妾冉が持つてきた。欣開封。 壬手 (118)157, 形状〇三甲／機能〇一丙)

遷陵県啓陵郷が里典・郵人の候補者を推薦し、除任するよう遷陵県から尉に指示するよう申請したが、県ではその申請が実情に合っていないとして却下した事例である。啓陵郷の人選と推薦・それを却下し二人を郵人とした遷陵県の判断とも独自のものです、Aの事例となる。

廿六年三月壬午朔癸卯左公田丁敢言之佐州里煩故為公田吏徙属事荅不備分

負各十五石少半斗直錢三百一十四煩冗佐署遷陵今上責校券二謁告遷陵

令官計者定以錢三百一十四受勾陽左公田錢計問可計付署計年為報敢言之(下略)

秦・漢時代地方行政における意思決定過程

高村

第九十七卷

五

泰王政二六年（前二二）三月二日、左公田の丁、申し上げます。佐で、州里の煩は、もと公田の吏で、異動しました。業務において小豆の不足があり、分担賠償はそれぞれ一五石三分の一斗、価格は三三四銭です。煩は元佐として遷陵に着任しています。今、責校券二点を提出します。遷陵に通告し、官の会計担当に三三四銭を確定した上で、旬陽の左公田に銭計を交付させるようお願いいたします。どのような計を付したのかを問い合わせます。計の年度を記して返答として下さい。以上申し上げます。

(J18)63の一部形状〇三甲／機能〇一甲)

これは旬陽県の左公田が、賠償を抱えた吏の負債に関係する処理について、旬陽県を通じ転属先の遷陵県で行なうよう求めた事例である。左公田の裁量権の範囲で負債関連処理を実施したことは疑いないが、一方で、同様の負債関連業務は、二〇一〇簡にもみられるように珍しくはなく、半ばルーティンワーク化した部分もあろう。Bの事例といえよう。

卅三年二月壬寅朔朔日遷陵守丞都敢言之令曰恒以

朔日上所買徒隸数●問之母当令者敢言之（正面）

二月壬寅水十一刻刻下二郵人得行 國手（背面）

始皇三三（前二二四）年二月一日、遷陵守丞の都、申し上げます。令に「常に一日を以って購入した徒隸の数を上申せよ」とあります。●この件を問い合わせたところ、令には該当いたしませんでした。以上申し上げます。二月一日水十一刻刻下二、郵人の得が持つて行った。 國手 (J18)154, 形状〇三甲／機能〇一甲)

この事例は、毎月一日に購入徒隸数を上申する令に基づき、遷陵県が実施した調査結果の報告だが、特に郡から指

表Ⅱ

発信官府	類	事例数	%	備考
郡	A	4	40.0	
	B	0	0.0	
	C	6	60.0	
	計	10	100	
県	A	21	30.8	鞠 4・爰書 1・辞 1 を含む
	B	1	1.4	
	C	46	67.6	
	計	68	100	
県内諸官府 (尉・郷・諸官)	A	18	19.7	効 4・爰書 4 を含む
	B	12	13.1	
	C	61	67.0	
	計	91	100	
不明	A	8	25.8	
	B	5	16.1	
	C	18	58.0	
	計	31	100	
		200		

分類不明の三例は除外。県 A 類に泰山木功右□丞の二例 (J1⑧462 (1) (2)) を含む。小数点以下は第一位まで表記。以下切り捨て。

示された形跡はなく、ルーティンワークとみてよい。仮に郡の指示があっても、その指示自体が郡のルーティンワークであろう。C の事例となる。

以上のような観点から、里耶秦簡の公文書簡牘で内容がある程度判明するものを三類型に分けた結果が本稿末尾の表Ⅰとなる。以下ではその集計結果である表Ⅱをみる。

郡については事例数の関係で参考程度にしかないが、郡・県・県内諸官府とも C 類事例が多く、郡で六〇%、県で六七%、諸官府で六七%となっており、これに半ばルーティンワークの B 類事例を加えれば、県で七〇%近く、県内諸官府で八〇%の数値となる。<sup>(14)</sup> このように秦代の県行政運営では、ルーティンワークに類する業務や、規定・指示通りに実施すればよい業務が相当多く、県や諸官において独自の意思決定を必要とする業務は

多くなかったことがわかる。換言すれば、県では、あらかじめ君主が律令等という形で意思決定をしてあり、それに基づき半ば「自動的」に処理できる行政業務が多いといえる。

では、独自の意思決定が行なわれたA類の内容はどのようなものであろうか。県のA類(全一九例、泰山木功右□丞の二例(J1⑧462(1)(2))を除く)からみてみると、

- (a) 県内諸官府からの申請等の差し戻し(四例) … J1⑧130 + 190 + 193・135(2)・157(1)・2010
- (b) 吏任用・人員不足連絡等の人事関連(二例) … J1⑧71・197(2)
- (c) 督促・廟管理分担・複写依頼・自言付支払命令等の各種業務(四例)  
… J1⑧137・138・201(1)・1008 + 1461 + 1532
- (d) 県内諸官府人員の召喚(二例) … J1⑧770・1552
- (e) 裁判の供述の「辞」(一例) … J1⑧754
- (f) 裁判における訊問の「爰書」(一例) … J1⑧918
- (g) 鞠(四例)<sup>(15)</sup> … J1⑧209・1246・1743 + 2015・2191

(h) A類の追(送付済書類で指示・依頼した事項に対する反応がない際の再送付・督促)(一例) … J1⑧197(2)となる。(a)は県の実務部門である県内諸官府からの申請などについて、不適切なものを差し戻しており、指揮・監督といえる。(b)は人事関連である。(c)が様々な行政運営となるが、実際にはB類との明確な区別がつきにくいものも多い。比較的単発の事態へ対応したものと考えればよいだろう。(d)～(g)は広く裁判関連とまとめることも可能で



ある。召喚事例も、

卅五年五月己丑朔庚子遷陵守丞律告啓陵

鄉嗇夫鄉守恬有論事以旦食遣自致它

有律令（正面）

五月庚子□守恬□□

敬手（背面）

始皇三五（前二二二）年五月一二日、遷陵守丞の律、啓陵鄉嗇夫に通告する。郷守の恬に判決の事がある。旦食時に自らを派遣して出頭せよ。他については律令がある。五月一二日、□守恬□□。敬手（J18770、形状〇二甲／機能〇一丙）

という事例のように、裁判と関わる場合も珍しくなかった。<sup>(16)</sup> 県のA類事例は二〇例足らず（泰山木功右□丞の二例を除く）ながら、そこから検討すると、秦代の県において、長官・次官らの判断で意思決定を実施する業務の中核を占めたのは、裁判・人事・隸下官府の指揮監督とみてよいのではないか。<sup>(17)</sup> その他、基本的にはルーティンであるものの、ルーティン通りに進まない事態などが生じた際に、適宜裁量権の範囲内で処置する業務が含まれると考えられる。郡については史料不足により論じ難いが、前漢後半に至っても県への指揮・監督が主業務であり続けたとの指摘を是とするならば、<sup>(18)</sup> 県の隸下諸官府への対応と本質的に差はないであろう。

後漢になり、郡・県の間で組織ぐるみの有機的関係が成立し、<sup>(19)</sup> 諸曹の活動が活発化したのが、郡・県地方行政において処理すべき業務に根幹からの変化が生じたわけではなく、処理方式が変わったということであり、上記の結果を漢代に敷衍しても大過ないと考ええる。

## 二、郡県行政における意思決定過程

前節で、秦代の県では令・丞の意思決定を要する業務の多くを、裁判関連が占めていた可能性があることを指摘した。裁判の手続きについて、初山明・宮宅潔両氏はそのかなりの部分を下級官吏が担っていたとする。県令・丞による判決は属吏の調査や報告に基づいてなされる面があったことになる。その際、担当属吏から事案調査報告等があったと考えられるが、複数の官吏からの意見を聴取していたことが、張家山漢簡『奏讞書』・岳麓秦簡『為獄等状』<sup>(21)</sup>などにみえる「吏議」「或曰」の存在から判明する。本稿ではこの「吏議」を奏讞実施機関所属の吏によるもの<sup>(22)</sup>と考える。挙例しよう。

●吏議、「闕与清同類、当以從諸侯来誘論」。●或曰、「当以奸及匿黥春罪論」。

吏の議では「闕と清は同類で、「從諸侯来誘」により判決すべきである」とする。異見では「奸」及び「匿黥春罪」により判決すべきだ」とする。  
(張家山漢簡「奏讞書」24・25簡の一部、形状〇一／機能二二)

●吏議曰、「癸・瑱等論当毆。沛・綰等不当論」。或曰「癸・瑱等当耐為候。令瑱等環癸等錢、綰等…」。

吏の議では「癸・瑱等は罪に該当する。沛・綰等は罪に該当しない」とする。異見では「癸・瑱等は耐刑として候とするに該当し、瑱等に癸等の錢を返還させる。綰等…」(岳麓書院藏秦簡「為獄等状」0094／024正、形状〇一／機能二二)これらの史料の存在から、裁判における県の意思決定に際して、複数の官吏の意見を聴取することが行なわれていたことは明らかである。「吏議」「或曰」といった意見の提示が、複数官吏による会議・議論形式で行なわれたのか、

それとも個別に長官からの諮問への回答ないし属吏からの具申という形式だったのかは判然としないが、一つの事案に対する異なる意見が出るという点からみて、前者の形式が多かったように思われる。<sup>(23)</sup>この議論により結論がまとまれば、それが県令により県の意味として決定され、まともなかつたり疑義が生じたりすれば、奏讞して郡の判断を求めた。

そして各官吏による意見の表明は、口頭で実施されていたのではない。後漢明帝期の事例だが、青州刺史の王望が救恤のため独断で布穀を支給した件について、「百官に章示し、詳らかにその罪を議せし」めたところ、尚書僕射の鍾離意が、「独り曰く」として意見を述べたところ、「帝、意の議を嘉し」王望は罪を問われなかったという（『後漢書』劉趙淳于江劉周趙列伝・王望の条）。百官の会議と、その際の口頭での意見とをともに「議」と記しており、「議」は口頭による意見表明を伴う会議形式の議論を意味すると考えられる。<sup>(24)</sup>その結論・異論の要旨が文字情報として記録されたものが、『奏讞書』『為獄等状』にみえる「吏議」「或曰」であろう。前掲註（9）永田論考で指摘された、中央政府における集議といった意思決定のミニチュア版ともいえる形態が郡・県に存在していたことを窺わせる。ただし先にみた通り、秦代の県の公文書を見る限りでは、会議などの意見聴取を必要とする意思決定は、実際には裁判に関わる業務が過半を占めたと思われる。遷陵県では、令・丞と、獄東曹・獄南曹、郷と戸籍担当の戸曹の属吏など、数名の吏が集まる会議になったと推測される。前漢後半期の居延漢簡や、『漢書』の事例でも、「議」は処罰に関係してみえる。<sup>(25)</sup>

任小吏忘為中程甚毋狀方議罰檄到各相与邸校定吏当坐者言須行法

秦・漢時代地方行政における意思決定過程 高村

小吏に任せて規定通りにすることを忘れるとは極めてなつておらず、罰を議する。檄が到着したらそれぞれ相互に調査し吏で罪に服すべき者を特定して言え。法を執行する。(55.13+224.14+224.15.A8,形状〇一／機能〇一丙)

(韓延寿)嘗て出で、車に上るに臨むや、騎吏一人後れて至る、功曹に勅して罰を議して白せしむ。<sup>(26)</sup>

『漢書』韓延寿伝

郡・県の長官が次官や属吏と議論したり、属吏らの議論結果を聴取の上で、意思決定していたことが窺えよう。

それではこうした裁判・処罰関連の事柄以外での郡県の意思決定はどのようなものと考えるべきか。遷陵県の場合、県廷の特定の某曹と特定の県内諸官府とが結びついており(前掲註(11)拙稿参照)、ある県内諸官府が担当する実務についての事柄であれば、必要に応じて県丞や関係する某曹に所属する属吏の意見を言わせて聴取(あるいは属吏から進言)し、意思決定していたのであろう。また、人事に関わることであれば、「令曹」など、県廷自体が行なう実務担当部門と目される曹所属属吏と同様のやり取りがあつたのではないか。

漢代でも、それは大きく変わらなかった。人事関連では、先の韓延寿伝では処罰を功曹に議論するよう申し付けている。『漢書』循吏伝には、黄霸が潁川太守の時のこととして、

許丞老い、聲を病み、督郵は之を逐わんと欲するを白す。<sup>(27)</sup>

また龔遂が渤海太守であつた時のこととして、

数年にして、上、使者を遣わして遂を徴し、議曹の王生、従うを願う。功曹以為らく、王生素より酒を嗜みて節度亡く、使うべからずと。<sup>(28)</sup>

といった話がみられ、いづれもこの後で太守から却下されるが、監察・人事考課を司る督郵や功曹が人事関連の事柄に対する進言を実施している。また黄覇も河南郡丞の時には、

丞と為り、議する処は法に当たり、人心に合う、太守甚だ之に任せ、吏民愛敬す。<sup>(30)</sup>

と、郡丞として議論を行なったことが知られる。このように、裁判以外の事柄についても、長官が次官や担当属吏による会議結果や個別の意見具申を適宜聴取し、その官府としての意思決定を実施していた点に大差はない。無論、全て長官個人の判断で属吏に指示を出して事を進める事例もあるう。ただし、そうした事例は一部の長官に限られるのではないか。

こうした会議形式を含めた口頭による意見聴取は、裁判を例とすれば、前掲註(11)拙稿で示した遷陵県廷組織では、県令・丞・獄東曹と獄南曹の吏など、長官・次官と直属属吏数名によるものが多かったと推察されるが、永田英正氏が辺境防衛組織で県と同格の甲渠候官を例に指摘するように、隸下諸官府の官吏を呼び出すこともあった。<sup>(31)</sup>『漢書』にも、京兆尹の趙広漢がその府から離れた所で執務する亭長を呼び出した例がある。

(趙広漢)嘗て記もて湖の都亭長を召し、(中略)亭長既に至りて、広漢与に語り、問事畢るや、謂いて曰く  
(下略)<sup>(32)</sup> 『漢書』趙広漢伝

具体的にどのような用件かはわからないが、亭長は話が終わるとそのまま帰されており、特に何らかの叱責や査問を受けたのではない。また会議ではないが、左馮翊の薛宣も、

(薛宣)郡中の吏民の罪名を得、輒ち召して其の県の長吏に告げ、自ら罰を行なわしむ。<sup>(33)</sup> 『漢書』薛宣伝

と、県の長吏を郡へ呼び出すことがあった。

ただし、隸下とはいえそれぞれ独立した官府を形成して実務に従事していたことを考慮すると、さほど規模が大きいとはいえない隸下諸官府の責任者などと呼び出す、あるいは彼らが県廷に直接赴いて意見を述べる、といったことを頻繁に実施するのは、効率的ではない。そこで、必要がない限りは、文書による意見聴取（意見具申）や指示がされたのではないだろうか。別稿でも述べたが、それは長官直属属吏でも同様で、直接口頭での報告・指示や、意見表明を全てにわたり実施するのは非効率的である。<sup>(35)</sup>

以上みてきたように、郡県官府において、その官府としての意思が決定されるにあたっては、長官一人の判断で決定されることもあるが、次官や直属属吏、隸下諸官府の責任者の意見を聴取した上で決定されることも多かった。その際、複数の官吏による議論が行なわれたり、文書での意見聴取・具申などが行なわれたりしていた。後者は特に、長官の所在する本部から離れた隸下諸官府の責任者等と呼び出すのが非効率的な場合に選択されたが、前漢後半期には長官直属属吏と長官の間でも、簡略化された文書によるやりとりが常態化していた。次に、その文書による意思決定について検討したい。

### 三、「公文書的書信」と郡県官府の意思決定

前節で検討したように、郡県官府での意思決定と決定は、長官が一人で判断する場合を除けば、長官以外の官吏の意見を聴取する事例も多かった。その際に、直接口頭で述べられた意見を聞くのではなく、文書を用いることが

あったが、そこで用いられたのが書信の要素を持ちつつ公文書同様の働きを示す「公文書書信」である。<sup>(36)</sup>となれば、「公文書書信」は、官府内での意思決定過程を考察するにあたって、非常に重要な史料ということになろう。そしてそれは、書信の非公式的性格が、意思決定という未だ決定に至らない段階での官府内の意思疎通や意見聴取・意見具申には、都合よく作用したからであろう。

ところで、これらの「公文書書信」のうち、直屬属吏と長官との間で用いられた、「白」字簡<sup>(37)</sup>にあらためて注目したい。

尉史臨白故第五燧卒司馬誼自言除沙殄北未得去年九月家属食誼言部以移籍廩令史田忠不肯与誼食

尉史の臨、申し上げます。もとの第五燧卒司馬誼が申し立てるには、殄北を除沙したもの、まだ去年九月の家族の食を得ておらず、誼は部に言つて籍を送ったものの、支給担当令史の田忠は誼に食を与えようとしないとのことでした。

(89.2.A8,形状〇三甲／機能〇三甲A)

史馮白吞遠候長章檄言遣卒范詡丁放張況詣官今皆到●奏発書檄

皆見



史の馮申し上げます。吞遠候長の章の檄に、卒范詡・丁放・張況を遣わして官に出頭させるとありましたが、今皆到着しました●書檄を開封して提出いたします。

みな見た

(EPT59.36.A8,形状〇三甲／機能〇三甲A、あみかけ部分別筆)

これらの「白」字簡は、甲渠候官に届いた隷下の戍卒や候長などからの文書内容を元に、甲渠候に対して報告をし

秦・漢時代地方行政における意思決定過程 高村

第九十七卷 一五

たり判断を求めたりしたものである。「白」の後が甲渠候に伝える内容となるが、ここで「白」を用いる理由は何であろうか。無論のこと、これまでの拙稿でも述べてきたとおり、本質的に書信であるため、書信に多用される「白」が用いられているのであるが、典籍文献史料中、長官に対し次官・属吏らが直接口頭で「申し上げ」ていると受け取れる場面で「白」字が用いられることがある点が注意される。

丞掾数白（『漢書』韓延寿伝）・賊曹掾史自白請至姑幕（『漢書』朱博伝）・功曹諸掾即皆自白（『漢書』朱博伝）・督郵白欲逐之（『漢書』循吏伝・黃霸条）・明府且止、願有所白（『漢書』循吏伝・龔遂条）・主簿白以為倨（『後漢書』龐參列伝）・掾史白遣家避難（『後漢書』陳球列伝）・祐悉以買筆書具与之、因白郡将（『後漢書』党錡列伝・劉祐条章懷太子注引謝承後漢書）・掾史白請召之（『後漢書』循吏列伝・任延条）

以上は州郡長官に対する事例である。無論、これらもなんらかの文書を用いた可能性もあるが、少なくとも文脈からは直接口頭で「申し上げて」いるとみなせよう。このように、直接口頭で「申し上げる」動作を示すのが「白」ならば、「白」字簡も実際は書面ながら、直接口頭で述べていると見立てて使用している側面があるのではないか。書信を見直してみると、「白」字の使用の有無にかかわらず、文面中、本来は直接面会の上で話すべきところ、遠隔地にいる、業務繁多につき、体調不良で…などの理由により、やむなく書面でいいたいことを書き送る、といった語句が記された書信は珍しくない。秦から前漢末にかけての書信類（秦代の里耶秦簡二例、前漢中期以降の天長漢簡<sup>(38)</sup>・尹湾漢簡から一例ずつ、居延漢簡から二例）からそうした語句の事例を抜き出して掲げる。

居者深山中母物可問進書為敬



山深きところで進物を以てご挨拶もできず、書面を以て敬意を表し…

母以問進書為敬

(J1⑧659 + 2088, 形状○三甲／機能○三甲 A または B)

ご挨拶もできず、書面を以て敬意を表し…

(J1⑧823 + 1997, 形状○三甲／機能○三甲 A または B)

宜身至前不宵（肖）伏病謹使使者

自ら参上すべきところ、不肖の身は病に伏せっており謹んで使者を遣わし…(M19: 40-12A, 形状○三甲／機能○三甲 B)

迫秉職不得離国謹遣吏奉謁再拜

担っております業務に苦しめられており任国を離れられず、謹んで吏を遣わして謁を差し上げます

(YM6D16B, 形状○三甲／機能○三甲 C)

迫職不得至前叩頭叩頭

業務に苦しめられておりまして参上いたしかねます…

(72.4.A8, 形状○三甲・残二／機能○三甲 A か B)

欲自往迫薪（新）候長不得職

自ら行こうとしたのですが新たに候長となったものの職として適任ではなく…

(214.16A.A8, 形状○二甲・残一／機能○三甲 A か B)

これらの事例から、元来書信とは、直接会って話すべき所、何らかの理由で会えない（という建前を前面に出した  
場合を含む）場合に用いる代替手段と認識されていた一面があるといえる。それは、公務に関わる内容であろう

秦・漢時代地方行政における意思決定過程 高村

第九十七卷 一七

と私用であろうと、完全に異なる所はない。

官府の意思決定過程において、「公文書的信」は、書信の持つ非公式性が、定型的な公文書に比べて未だ決定に至らない段階での官府内の意思疎通や意見聴取・意見具申に都合がよいという側面の他に、本来は直接会って話し合うべき事柄だが、やむを得ない理由により書面で代替するにあたっては、書信の持つもう一つの性質である「直接会話の代替手段」という側面が好まれて、選択されたと考えられるのではないか。長官と直属属吏の間で用いられた「白」字簡の他に、物理的に離れた隸下諸官府官吏との間では、未だ決定に至らない事柄について記す文書として、「公文書的信」の中で長官の意向を示す「記」があり、それに対して隸下諸官府官吏は同じく書信の要素を持つ文書で返答している。<sup>(39)</sup>

とすれば、秦・漢時代では、官府の意思決定過程においては、関係する官吏が直接議論した上で意見を集約し、長官が判断する形態が本来的なあり方であると認識されていた可能性がある。しかし実際には隸下諸官府の距離の遠近や、効率の問題があり、頻繁に「議」を行なうことはできない。そこで、文書による指示や意見聴取・意見具申といった手段が選択されるが、その際、決定に至らない事項という点で、定型的な公文書の形式は好まれず、非公式でかつ直接会話の代替手段でもある書信が選択されたと考えられよう。換言すれば、「公文書的信」の存在は、地方官府の中での複数の官吏による直接会話、音声言語による行政上の意思決定過程の痕跡ということができるのではなからうか。<sup>(40)</sup>

## おわりに

以上、秦・漢時代の郡県を中心とする地方官府における行政上の意思決定過程と、そこで用いられた「公文書的書信」について検討した。その結果、秦の遷陵県では、行政実務の多くがルーティンワークに類し、県での意思決定を要するものは、裁判を中心に人事や隸下諸官府への指揮監督であった。これは漢代でも基本的に同一と考えられる。その意思決定過程では、長官の他に次官・当該業務担当の直属属吏らによる意見聴取があった。これは本来関係官吏が集まって口頭で議論し意見を表明する会議形式のものであったと思われるが、実際には物理的制約や効率の面から、文書も併用された。その際には、「公文書的書信」が、非公式でかつ、直接会話の代替手段でもある点で、本来は直接集合しての「議」で行なうことが望ましいと認識されていた、官府としての意思決定過程における官吏間での意思疎通に際して、会議を行なえない際などに用いられた点を指摘した。音声言語による行政活動・意思決定の痕跡という点でも、書信簡牘が秦・漢時代の行政研究に重要な史料であると示せた。また後漢中・後期の公文書は、前漢期では書信とされる要素を含むと指摘されるが、こうした公文書の変遷と、音声言語による行政活動が文書に変化したという変遷は、同一の方向性を持つ動きと評価し得る。漢代以後もこのような動きは続いたと思われるが、その源流が秦・漢時代にあったことも、改めて示せたのではないか。

最後に、地方官府における意思決定過程において、口頭で意見を述べ合う会議やその代替としての書信利用が重要な意味を有していたとして、それが前掲註(9)永田論考の指摘する、古代の集議の遺制とみてよいかどうかを

考えてみたい。<sup>(42)</sup>

まず、属吏層に当該郡県所在地域出身者が多く、彼らにその地域社会の代表という一側面があったことから、行政上の問題について、長官が属吏を含む担当・関係官吏に議論させて意見を聴取したことは、単発の意見聴取や意見具申も含め、当該地域社会の意向を斟酌する意義・効果があったといえる。この点で、秦・漢地方行政の中で行なわれた会議は、行政実務の一環に組み込まれているが、地方行政中に残存する集議の遺制としての性質を有していた。秦・漢代社会の性質が地方行政のあり方に影響したとの評価もできよう。

しかし同時に注意しておくべきは、漢代地方行政の中で行なわれた会議は、古代の集議と変容・変質している部分もまた大きい、という点である。本稿第一節でも触れたが、秦・漢の県級官府では行政実務が相当程度ルーティンワーク化しており、県で何かを決めるべき事柄はあまり多くない。また、例えば裁判でも議論に加えられた官吏の数もそれほど多いとは考えにくい上、結論が出なければ上級機関に判断を仰いでいた。また、意見を長官が取り上げないこともあった。後漢後期の郡での事例にも次のような事例がある。<sup>(44)</sup>

（孟嘗）郡に仕えて戸曹史と為る。上虞に寡婦有り、至孝にして姑を養い、姑は年老い寿もて終わる。夫の女弟先に嫌忌を懷く、乃ち婦は供養を厭苦して鳩を其の母に加うと誣いて県庭に列訟す。郡は尋察を加えず、遂に其の罪を結竟す。嘗は先に枉状を知り、備さに之を太守に言うも、太守為に理めず。

『後漢書』循吏伝・孟嘗の条

以上のようにみてみると、特に会議は地方行政中に残存する集議の遺制としての性質を有していたが、逆に行政の

中に組み込まれることでその性質に変化が生じたことは否めない。さらに時間の経過とともに、本稿でも触れた効率化の追求といった要因もあって、音声言語による行政は書信という代替手段により文書行政化し、その中で会議や、単発の意見具申も、単なる行政上の手段の一つという側面が強くなったと考えられる。後漢に入り、功曹に行政を任せる長官の逸話が増えることが指摘されている<sup>(45)</sup>。これにも長官による地域社会の意向尊重という側面があることは否定できないが、そこで尊重された「地域社会の意向」とは、主として豪族層らの意向になりつつあった<sup>(46)</sup>。とすれば後漢期では、地方行政における会議について、古代の集議の遺制という性質はかなり薄れていたのではないか。

文書行政とはやや離れた議論となったが、漢という時代について、いわゆる「都市国家」の遺風が残存している一方で、それが薄れていく時代という位置づけを、行政実務の検討結果からも試みるのが許されるのではなからうか。大方のご批正を請う。

# 註

参照。

- (1) 文書行政については、永田英正「文書行政」(松丸道雄・古賀登・永田英正・尾形勇・佐竹靖彦編『殷周秦漢時代史の基本問題』汲古書院、二〇〇一年)参照。
- (2) 二〇世紀末までの簡牘史料の概要として、駢宇騫・段書安『本世紀以来出土簡帛概述』(万卷楼、一九九九年)
- (3) 永田英正『居延漢簡の研究』(同朋舎、一九八九年)。
- (4) 最近のものとしては、初山明「日本における居延漢簡研究の回顧と展望―古文書学的研究を中心に―」(初山明・佐藤信編『文献と遺物の境界Ⅱ―中国出土簡牘史料の生態的研究』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、

二〇一四年)を参照。

(5) 大庭脩「居延出土の詔書冊」(同氏『秦漢法制史の研究』第三篇第二章、創文社、一九八二年「初出一九六一」)。

(6) 紙屋正和『漢時代における郡県制の展開』(朋友書店、二〇〇九年)。

(7) 文書行政をタイトルに冠した近年の研究としては、富谷至『文書行政の漢帝国―木簡・竹簡の時代』(名古屋大学出版会、二〇一〇年)がある。

(8) 辺境防衛機構内部の監察については、拙稿「辺境出土史料からみた漢代の地方監察」(『西北出土文献研究』四、二〇〇七年)参照。

(9) 永田英正「漢代の集議について」(『東方学報』京都四三、一九七二年)。

(10) 拙稿「中国古代簡牘分類試論」(『木簡研究』三四、二〇一二年)。この拙稿に基づき、本稿でよく用いる語句について、「文書：甲(発信者)から乙(受信者)に対して甲の意思を表明するために作成された意思表明手段」・「公文書：『公的権威もしくは公的権力の元に公的なものとして行なわれた意思表明である』という形式をとる意思表明手段」・「書信：『公的権威もしくは公的権力の元に公的なものとして行なわれた意思表示ではない』という形式をとる

意思表示手段」とする。漢代の公文書・書信それぞれにみられる特徴的な表現の有無、使用される簡牘形状により、個々の事例を判別した。

(11) 拙稿「里耶秦簡第八層出土簡牘の基礎的研究」(『三重大学学』一四、二〇一四年)。この拙稿では、里耶秦簡の公文書簡牘は、基本的には一点の文書とすべき事例でも、実際には複数の公文書に分解して理解できる複合文書ともいふべき事例が多いことを指摘し、一点の公文書を解析して複数の公文書として扱った。本稿でも、この方針を引き継ぐ。

(12) 無論「独自の意思決定」とはいっても、建前上は判断の根拠となる律などがあり、官吏がいちいち判断しなくても行政運営できる、ということであろうから、完全に独自の意思や裁量による決定が可能なのは、極論すれば皇帝以外には存在しない。ただし本稿では、実態として郡・県・諸官府の長官や次官、責任者に許されていたと思われる範囲での判断(裁量)に拠って下したと考えられる意思決定を、「独自の意思決定」とする。

(13) 本稿でいう県内諸官府は、県尉・各郷・少内や倉などの県実務担当官を指す。なお、便宜的に令佐・令史・獄史などの官吏が発信した爰書なども「県内諸官府」発信事例

の中に入れてある。令史・令佐については、県令・県丞直属の色彩が強いため、県発信とした方がよいかも知れないが、県令・丞の部下であるという点を重視して、県内諸官府に入れた。

(14) なお、県内諸官府のA類事例中、下記のような爰書が含まれる。

卅五年七月戊子朔己酉都郷守沈爰書高里士五広自言謁以  
大奴良完小奴峙饒大婢闌願多□

禾稼衣器錢六万尽以予子大女子陽里胡凡十一物同券齒  
典弘占

始皇三五(前二二)年七月二日、都郷守の沈の爰書。

高里の士五の広が申し立てるには、「大奴の良・完、小奴の峙・饒、大婢の闌・願・多・□、禾稼・衣器・錢六万を、全て子の大女子で陽里の胡に与えたく申請いたします」と。全一件、券の刻みと同じである。典の弘が登記した。

(J18)J154正面形状二二／機能〇二丁

こうした財産分与などの爰書はルーティン化の度合いが強く、B類とすべきかも知れない。B類とすると、J18)J154の他に、J18)J143+J45・J53が該当し、県内諸官府はA類一五例(一六・四%)、B類一五例(一六・四%)で、A類が減少する。また、効には、

啓陵津船人高里士五啓封当踐十二月更□廿九日□  
正月壬申啓陵郷守繞効

卅三年正月壬申朔朔日啓陵郷守繞敢言之上効一牒□

啓陵津の船人、高里の士伍啓封は、一二月の当番を実施すべきであるのに…二十九日…。正月壬申、啓陵郷守の繞が効する。始皇三三年(前二二四)正月一日、啓陵郷守繞申し上げます。効一枚を提出いたします…。

(J18)651正面形状〇三甲・残一／機能〇一甲)

など、これも律令等に照らして判定されているだけで、裁量権に基づくかどうか微妙である。そうした点で、類似の効も除くとすると、J18)651のほか、433・671+721+2163が該当するので、A類は一二例(二三・一%)、B類は一八例(一九・七%)となる。

(15) 里耶秦簡の鞫関連簡牘については、陶安あんど『「鞫書」と「鞫状」に関する覚書』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「中国古代簡牘の横断領域的研究」ホームページ、[http://www.aalrfs.ac.jp/users/Ejina/note/07\(Haher\).html](http://www.aalrfs.ac.jp/users/Ejina/note/07(Haher).html)、二〇一四年)参照。

(16) 秦・漢期の裁判の進行については、初山明「秦漢時代の刑事訴訟」(同氏『中国古代訴訟制度の研究』第二章、京都大学学術出版会、二〇〇六年「初出一九八五」)のほ

か、胡仁智『両漢郡県官吏司法権研究』（法律出版社、二〇〇八年）、程政挙『漢代訴訟制度研究』（法律出版社、二〇一〇年）など参照。語句の解釈には、陶安あんど『秦漢刑罰体系の研究』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇〇九年）の示す解釈も参照。

(17) これは『続漢書』百官志に、県令の職務として「理訟平賊」、県丞の職務として「典知倉獄」とあることと一致し、鄒水杰『両漢県行政研究』（湖南人民出版社、二〇〇八年）で政治的職掌の代表として訴訟と治安が掲げられている。

(18) 紙屋正和「前漢前半期における県・道による行政」・「前漢後半期における中央政界と郡・国」（前掲註（6））同氏著書第一編第一章「初出一九八二・二〇〇五」、第二編第七章「初出一九九一」。

(19) 紙屋正和「前漢時代における郡府・県廷の属吏組織と郡・県関係」（前掲註（6））同氏著書第四編第一章「初出一九九〇」。

(20) 宮宅潔「秦漢時代の裁判制度——張家山漢簡『奏讞書』より見た——」（『史林』第八一卷二号、一九九八年）、杵山明「司法経験の再分配」（前掲註（16）同氏著書終章）など。

(21) 岳麓書院藏秦簡は発掘状況などが不明で、史料的价值全体として張家山漢簡より劣るが、本稿では文字情報のみを利用するため、通常の史料同様に扱うこととする。

(22) 陶安「張家山漢簡『奏讞書』史議札記」（『出土文獻与法律史研究』二、二〇一三年）。陶安氏は、奏讞書等にみえる「吏議」を、県において、判決過程中で要する犯罪行為の弁別・罪名とそれに応じた刑の認定行為とする。

(23) 前掲註（20）杵山論考では、複数の官吏の議論と捉えている。

(24) 議の字義については、後漢中期の人の理解として、「議、語也」、「語、論也」「論、議也」（いずれも『説文解字』三上）とある。口頭での議論を排除する字義はないように思われる。無論、同内容の文書や筆記した資料を口頭と併用した可能性を排除するものではない。

(25) 官吏の処罰については、佐原康夫「居延漢簡に見える官吏の処罰」（『東洋史研究』五六—三、一九九七年）参照。

(26) 嘗出、臨上車、騎吏一人後至、勅功曹議罰白。

(27) 許丞老、病聾、督郵白欲逐之。

(28) 数年、上遣使者徵逐、議曹王生願從。功曹以為王生素耆酒、亡節度、不可使。

(29) 功曹・督郵の事績は、仲山茂「両漢功曹考」（『名古屋



大学東洋史研究報告』二七、二〇〇三年）が史料を博搜した論考で参照した。

(30) 為丞、処議当於法、合人心、太守甚任之、吏民愛敬焉。

(31) 永田英正「居延漢簡にみる候官についての一試論」

（前掲註（3））同氏著書第Ⅱ部第六章、「初出一九七三」。

現状の居延漢簡からみると、「議」のために候官隸下の部・燧の官吏が出頭してきたかどうかは明確ではない。ただし「議」ではないが、殿最の言い渡しなどの際に、普段は別に自己の官府で執務する複数の官吏が上級官府に集められた事例として、

後為茂陵令、会課、育第六。而漆令郭舜殿、見責問、育為之請。扶風怒曰、「君課第六、裁自脱、何暇欲為左右言」。

後に茂陵令となり、成績評価があり、蕭育は六番目であった。漆令の郭舜が最下位で責められたところ、育は彼のためにとりなした。扶風は怒って「君の成績は六番目で、自分が最下位ではなかっただけではないか、他人のために口添えしようとする暇などあるのか」と言った。

『漢書』蕭望之伝・子育などがあり、こうした際に併せて議論が行なわれても不思議ではない。

(32) （趙広漢）嘗記召湖都亭長、（中略）亭長既至、広漢与語、問事畢、謂曰（下略）。

(33) （薛宣）得郡中吏民罪名、輒召告其県長吏、使自行罰。

(34) 本稿でいう隸下諸官府の「独立」について、前掲註

(11) 拙稿の注（22）を参照。

(35) 拙稿「中国古代文書行政における書信利用の濫觴」『駁台史学』一五四、二〇一五年）でも触れたが、長官と物理的には隣り合っている直属属吏も、本稿第三節で掲げる「白」字簡という簡素な文書により長官との意思疎通を行なったことが知られる。

(36) 拙稿「漢代文書行政における書信の位置付け」『東洋学報』九一一、二〇〇九年）。

(37) これらの簡牘については、仲山茂「漢代における長吏と属吏のあいだ—文書制度の観点から—」（『日本秦漢史学会会報』三、二〇〇二年）参照。

(38) 天長漢簡の書信簡は、劉樂賢「天長紀莊漢墓『丙充国』書牘補釈」（同氏『戦国秦漢簡帛叢考』文物出版社、二〇一〇年「初出二〇〇八」）、山田勝芳「前漢武帝代の地域社会と女性徭役—安徽省天長市安樂鎮一九号漢墓木牘から考える—」（『集刊東洋学』九七、二〇〇七年）、廣瀬薫雄「安徽天長紀莊漢墓『賁且』書牘解釈」（『簡帛研究二〇一

一、『二〇一三年』など参照。

(39) 「記」は、鶴飼昌男「漢代の文書についての一考察—

『記』という文書存在—」(『史泉』六八、一九八八年、

連劭名「西域木簡中の記与檄」(『文物春秋』一九八九年創

刊号、一九八九年)、前掲註(37) 仲山論考、角谷常子

「簡牘の形状における意味」(富谷至編『辺境出土木簡の研究

』朋友書店、二〇〇三年)、鷹取祐司「漢代官文書の種

別と書式」(同氏『秦漢官文書の基礎的研究』第一部第一

章、汲古書院、二〇一五年「初出二〇〇三」、藤田高夫

「官記偶識」(『関西大学文学論集』五六―二、二〇〇六年)

など参照。

(40) なお、日本古代史でも文書行政と音声言語を利用した

伝達との関係についての研究がある。近年の研究として、

鐘江宏之「口頭伝達の諸相—口頭伝達と天皇・国家・民衆—」

(『歴史評論』五七四、一九九八年)、大平聡「音声言語と

文書行政」(『歴史評論』六〇九、二〇〇一年)、川尻秋生

「口頭と文書伝達—朝集使を事例として—」(平川南編『文

字と古代日本2—文字による交流』吉川弘文館、二〇〇五

年)など参照。また、富谷至「書記官への道—漢代下級役

人の文字習得」(前掲註(7) 同氏著書第Ⅱ編第一章「初

出二〇〇九」)で口頭伝達について触れるが、基本的に

「決定事項」の伝達に関係して論じている。

(41) 角谷常子「木簡使用の変遷と意味」(角谷常子編『東

アジア木簡学のために』汲古書院、二〇一四年)。

(42) 古代の民会は、貝塚茂樹「中国古代都市における民会

の制度」(貝塚茂樹著作集『中国古代の社会制度』二、中

央公論社、一九七七年「初出一九五四」)が指摘し、前掲

註(9) 永田論考、一般向けながら堀敏一「中国通史—問

題史としてみる」(講談社学術文庫、二〇〇〇年)が受け

継いでいる。

(43) 拙著『漢代の地方官吏と地域社会』結語(汲古書院、

二〇〇八年)。

(44) (孟嘗) 仕郡為戸曹史。上虞有寡婦、至孝養姑、姑年

老寿終。夫女弟先懷嫌忌、乃誣婦厭苦供養加鳩其母、列訟

県庭。郡不加尋察、遂結竟其罪。嘗先知枉状、備言之於太

守、太守不為理。

(45) 前掲註(29) 仲山論考参照。

(46) 後漢地域社会は、東晋次「後漢時代の政治と社会」

(同氏『後漢時代の政治と社会』終章、名古屋大学出版会、

一九九五年)、特に第三節「郷里社会の変質と共同体」を

参照。

(47) 都市国家の考え方については、集落形態面からの批判

がある。最近目睹したものでは王彦輝「早期国家理論与秦漢聚落形態研究―兼議宮崎市定的『中国都市国家論』」（『中国社会科学』二〇一四年第六期）などがある。しかし、地方行政の実態という点では、地域社会の意向を無視していないことは明らかであり、秦・漢時代の地方行政と地域社会との関係を説明する上で、現状の史料からみる限り、前掲註（42）掘著書などで示される都市国家論者の方向性は誤っていないであろう。

※本稿使用の出土史料テキストは以下の通り

尹湾漢墓簡牘 連雲港市博物館・中国社会科学院簡帛研究中心・東海県博物館・中国文物研究所共編『尹湾漢墓簡牘』（中華書局、一九九七年）

岳麓書院藏秦簡 朱漢民・陳松長主編『岳麓書院藏秦簡』参（上海辞書出版社、二〇一三年）

居延漢簡 勞幹『居延漢簡 図版之部』（中央研究院歷史語言研究所專刊之二十一、一九五七年）、謝桂華・李均明・朱国昭『居延漢簡積文合校』（文物出版社、一九八七年）、簡牘整理小組編『居延漢簡（壹）』（中央研究院歷史語言研究所專刊之一〇九、二〇一四年）、甘肅省文物考古研究所・甘肅省博物館・中国文物研究所・中国社会科学院歷史研究所

秦・漢時代地方行政における意思決定過程

高村

所編『居延新簡 甲渠候官』（中華書局、一九九四年）

張家山漢簡 張家山二四七号漢墓竹簡整理小組『張家山漢墓

竹簡「二四七号墓」』（文物出版社、二〇〇一年）、彭浩・

陳偉・王藤元男編『二年律令与奏讞書 張家山二四七号漢

墓出土法律文獻釈読』（上海古籍出版社、二〇〇七年）

天長漢簡 天長市文物管理所・天長市博物館『安徽天長西漢

墓発掘簡報』『文物』二〇〇六年第二期

里耶秦簡 湖南省文物考古研究所編『里耶秦簡（壹）』（文物

出版社、二〇一二年）、陳偉主編『里耶秦簡牘校釈（第一

卷）』（武漢大学出版社、二〇一二年）

〔付記〕本稿は、平成二三年度三菱財団人文科学研究助成「周縁領域からみた秦漢帝国の総合的研究」（代表・高村武幸）による成果の一部である。また、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革——中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」（代表・陶安あん）の成果も含まれる。

（明治大学文学部・准教授）

第九十七卷

二七

表 I

	簡番号	発信者	宛所	内容	類別
1	8-21	不明	不明	返答未到着の報告	B 不
2	8-41	不明	不明	「課」不応令通告	A 不
3	8-42	不明	不明	志提出	C 不
4	8-50	不明	不明	続食文書	B 不
5	8-60+656+665+748(1)	都府守胥	(樊道)	責取り立て	B 諸
6	8-60+656+665+748(2)	樊道部	遷陵丞	(1)伝達	C 県
7	8-60+656+665+748(3)	遷陵丞昌	少内	(1)(2)伝達	C 県
8	8-61+293+2012(1)	巴仮守丞	洞庭守	兵士関連?	A 郡
9	8-61+293+2012(2)	洞庭守礼	遷陵齋夫	(1)伝達	C 郡
10	8-62	遷陵丞昌	(洞庭郡)	当令者報告	C 県
11	8-63(1)	左公田丁	(旬陽県)	責取り立て	B 諸
12	8-63(2)	旬陽丞滂	遷陵丞	(1)伝達	C 県
13	8-63(3)	遷陵守丞敬	司空	(1)(2)伝達	C 県
14	8-64	不明	不明	当令者報告	C 不
15	8-66+208	門浅□丞	臨沅丞	伝達	C 県
16	8-67+652	尉守蜀	(遷陵県)	当令者報告	C 諸
17	8-69(1)	不明	(遷陵県)	労役関係連絡依頼	A 不
18	8-69(2)	(遷陵)丞繹	尉	(1)伝達	C 県
19	8-71	遷陵丞昌	(郡尉か)	吏任用	A 県
20	8-72	不明	不明	送り状	C 不
21	8-73	司空	(遷陵県)	穀物輸送連絡依頼	B 諸
22	8-75+166+485(1)	少内守公	(遷陵県)	計不明点連絡依頼	B 諸
23	8-75+166+485(2)	遷陵守丞臈之	郝丞	(1)伝達	C 県
24	8-75+166+485(3)	遷陵守丞臈	郝丞	迫	C 県
25	8-78(1)	洞庭仮卒史悍	(遷陵県)	不明	一 郡
26	8-78(2)	遷陵□	不明	(1)伝達?	C 県
27	8-85(1)	尉守□	(遷陵県)	当令者報告	C 諸
28	8-85(2)	遷陵守丞都	不明	(1)伝達	C 県
29	8-109(1)	不明	蓬県	鉄権送付要請?	A 不
30	8-109(2)	蓬丞章	不明	(1)伝達	C 県
31	8-110	倉	不明	続食文書	B 諸
32	8-130+190+193	(遷陵県)	(倉)	差し戻し	A 県
33	8-133(1)	酉陽具獄獄史啓	(遷陵県)	獄関係	A 諸
34	8-133(2)	遷陵守丞陞	司空	(1)伝達	C 県
35	8-135(1)	司空守穆	(遷陵県)	船返却連絡依頼	A 諸
36	8-135(2)	遷陵守丞敦狐	司空	差し戻し	A 県
37	8-136+144	倉守敬	(遷陵県)	報告・連絡依頼	C 諸
38	8-137	遷陵丞遷	畜官僕足	督促	A 県
39	8-138	遷陵□丞敦狐	令史	廟管理分担	A 県
40	8-140(1)	尉守備	(臨沮県)	報告・連絡依頼	C 諸
41	8-140(2)	臨沮丞禿	遷陵丞	(1)伝達	C 県
42	8-140(3)	遷陵丞昌	尉	(1)(2)伝達	C 県
43	8-141+668	免弩守涓	(遷陵県)	書到報告	C 諸
44	8-142	都郷守舍	(遷陵県)	送り状	C 諸
45	8-143(1)	畜□□	(遷陵県)	病馬関連報告	A 諸
46	8-143(2)	遷陵□	不明	不明	一 県
47	8-145	□□園	(遷陵県)	送り状	C 諸
48	8-152	少内守是	(遷陵県)	書到報告	C 諸
49	8-154	遷陵守丞都	(洞庭郡)	当令者報告	C 県
50	8-155	遷陵守丞色	少内	書到報告要求	C 県
51	8-157(1)	啓陵郷夫	(遷陵県)	郵人任用	A 諸
52	8-157(2)	遷陵丞昌	啓陵郷	差し戻し	A 県
53	8-158	遷陵守丞色	酉陽丞	書到報告	C 県
54	8-163	臧守慶	(遷陵県)	視事報告	C 諸

55	8-164+1475	少内武	(遷陵県)	上計用資料・連絡依頼	B	諸
56	8-169	倉□扱	不明	続食文書	B	諸
57	8-170	都郷守敬	(遷陵県)	虎捕殺功績報告	A	諸
58	8-173	庫武	(遷陵県)	派遣命令への返答	C	諸
59	8-175	不明	(遷陵県)	当令者報告	C	不
60	8-179	田量	(遷陵県)	送り状	C	諸
61	8-183	遷陵守丞説	(洞庭郡)	送り状	C	県
62	8-196+1521	都郷□□	(遷陵県)	刑徒人員報告	C	諸
63	8-197(1)	遷陵守丞配	(洞庭郡)	人員不足連絡	A	県
64	8-197(2)	遷陵守丞配	(洞庭郡)	追	A	県
65	8-198+213+2013	遷陵丞昌	郷官	文書伝達指示	C	県
66	8-199	畜官守内	(遷陵県)	送り状	C	諸
67	8-201(1)	充戊	西陽丞	書類複写依頼か	A	県
68	8-201(2)	西陽守丞扶	尉	(1)伝達	C	県
69	8-201(3)	尉佐	(西陽県)	(1)への返答	C	諸
70	8-209	遷陵拔	なし	鞠	A	県
71	8-228(1)	内史守衷	(各郡)	伝達命令	C	郡
72	8-228(2)	南郡守恒	洞庭	(1)伝達	C	郡
73	8-274	田守武	(遷陵県)	辞の上奏か	C	諸
74	8-343	不明	不明	当令者報告	C	不
75	8-369+726	倉歌	(遷陵県)	当令者報告	C	諸
76	8-378+514	遷陵丞遷	少内	辞の下行	C	県
77	8-394	不明	不明	当令者報告	C	不
78	8-433	令佐華	(遷陵県)	劾	A	諸
79	8-462(1)	(泰山木功右□丞)	不明	符の受領報告請求	A	県
80	8-462(2)	泰山木功右□丞	不明	追	A	県
81	8-478	少内守是	司空色	送り状	C	諸
82	8-508	不明	不明(畜夫)	計しないことの詰問	A	不
83	8-547	不明	不明	問い合わせ返答	C	不
84	8-602+1717+1892+1922	遷陵丞	不明	送り状	C	県
85	8-644	不明	不明	律令解釈問い合わせ	A	不
86	8-645	貳春郷守根	(遷陵県)	送り状	C	諸
87	8-647	西陽守丞又	遷陵丞	問い合わせ返答	C	県
88	8-648	司空守□	(遷陵県)	送り状・運配報告	C	諸
89	8-651	啓陵郷守繞	(遷陵県)	劾	A	諸
90	8-653(1)	遷陵守丞固	(洞庭郡)	送り状	C	県
91	8-653(2)	遷陵□	(洞庭郡)	不明	—	県
92	8-657(1)	琅邪仮守□	内史・属邦・郡守	兵士関連?	A	郡
93	8-657(2)	洞庭守礼	県畜夫	(1)伝達	C	郡
94	8-657(3)	遷陵守丞臈之	尉官	(1)(2)伝達	C	県
95	8-660	都郷守□	(遷陵県)	報告	C	諸
96	8-661(1)	貳春郷茲	(遷陵県)	里典任用	A	諸
97	8-661(2)	(遷陵)	尉?	(1)伝達	C	県
98	8-663	倉是	(遷陵県)	送り状	C	諸
99	8-664+1053+2167	遷陵守丞都	(洞庭郡)	当令者報告	C	県
100	8-666+2006	司空守敞	(遷陵県)	伝関係	B	諸
101	8-671+721+2163	尉守建	(遷陵県)	劾	A	諸
102	8-672	田官守敬	(遷陵県)	連絡依頼	C	諸
103	8-673+2002(1)	貳春□	(遷陵県)	労役関係	B	諸
104	8-673+2002(2)	遷陵守□	不明	(1)伝達	C	県
105	8-677	臧守信成	(遷陵県)	連絡依頼	C	諸
106	8-681	不明	(遷陵県)	送り状	C	不
107	8-686+973	庫守悍	(遷陵県)	送り状	C	諸
108	8-697	司空□	(遷陵県)	送り状	C	諸
109	8-702+751	不明	遷陵丞	遷陵の指示へ報告?	C	不
110	8-704+706(1)	遷陵守丞齡	(洞庭郡)	人口関連書類の追	C	県
111	8-704+706(2)	(遷陵)守丞齡	(洞庭郡)	人口関連書類の追	C	県

112	8-705	遷□	(洞庭郡)	当令者報告	C	県
113	8-724	不明	不明	送り状	C	不
114	8-731	(貳春郷)	(遷陵県)	戸計送り状	C	諸
115	8-736	倉是	(遷陵県)	送り状	C	諸
116	8-746(1)	枳郷守糾	(洞庭郡)	犯罪者事実確認報告	C	県
117	8-746(2)	枳郷守糾	(洞庭郡)	(1)の追か	C	県
118	8-746(3)	枳郷守定	(洞庭郡)	(2)の追か	C	県
119	8-746(4)	□丞□(不明)	不明	(1)～(3)への返答	C	不
120	8-754	遷陵丞昌・獄史堪	なし	辞	A	県
121	8-755～759(1)	洞庭守礼	遷陵丞	官吏処罰指示	A	郡
122	8-755～759(2)	洞庭仮守繹	遷陵	追	A	郡
123	8-767	啓陵郷趙	(遷陵県)	当令者報告	C	諸
124	8-768	遷陵守丞有	(洞庭郡)	送り状	C	県
125	8-769	啓陵郷守狐	(遷陵県)	報告	C	諸
126	8-770	遷陵守丞律	啓陵郷耆夫	召喚	A	県
127	8-787	貳春郷守綽	(遷陵県)	送り状	C	諸
128	8-801	啓陵郷守高	(遷陵県)	送り状	C	諸
129	8-890+1583	少内守増	(遷陵県)	送り状(券の実物)	C	諸
130	8-904+1343(1)	不明	(遷陵県)	逮書	A	不
131	8-904+1343(2)	遷陵守丞色	倉・司空	(1)伝達	C	県
132	8-918	遷陵拔	不明	爰書	A	県
133	8-962+1087	貳春郷茲	(遷陵県)	送り状	C	諸
134	8-1008+1461+1532	遷陵守丞銜	少内	自言付支私命令	A	県
135	8-1060(1)	不明	(遷陵県)	劾	A	不
136	8-1060(2)	遷陵守丞銜	(洞庭郡)	(1)伝達	C	県
137	8-1069+1434+1520	庫武	(遷陵県)	送り状	C	諸
138	8-1095	都郷□	(遷陵県)	送り状	C	諸
139	8-1207	貳郷守吾	(遷陵県)	送り状	C	諸
140	8-1219	上柱守丞敬	遷陵丞	従事依頼	C	県
141	8-1246	遷陵丞昌	なし	鞠	A	県
142	8-1278+1757	啓陵郷守逐	(遷陵県)	送り状	C	諸
143	8-1279	不明	(遷陵県)	送り状	C	不
144	8-1280	貳春郷守畸	(遷陵県)	送り状	C	諸
145	8-1287	貳春郷守□	(遷陵県)	送り状	C	諸
146	8-1340	□郷守吾	(遷陵県)	送り状	C	諸
147	8-1436	不明	不明	当令者報告	C	不
148	8-1443+1455	都郷守武	(遷陵県)	爰書	A	諸
149	8-1449+1484	遷陵守丞茲	(洞庭郡)	報告	C	県
150	8-1452	倉守敬	(遷陵県)	送り状	C	諸
151	8-1454(1)	不明	不明	都郷斂徴不調報告	B	不
152	8-1454(2)	不明	不明	(1)伝達	C	不
153	8-1459	貳春□	(遷陵県)	連絡依頼の追か	C	諸
154	8-1463(1)	令史華	(遷陵県)	爰書	A	諸
155	8-1463(2)	遷陵守丞胡	不明	(1)伝達	C	県
156	8-1477	尉広	(遷陵県)	移住関係	A	諸
157	8-1490+1518	倉武	(遷陵県)	徒隸人事	B	諸
158	8-1510(1)	庫後	(遷陵県)	人員要請連絡依頼	A	諸
159	8-1510(2)	遷陵守丞敦狐	司空	(1)伝達	C	県
160	8-1511	遷陵丞昌	(洞庭郡)	送り状	C	県
161	8-1514	庫守悍	(遷陵県)	当令者報告	C	諸
162	8-1515	貳春郷守綽	司空	労役報告	C	諸
163	8-1516	遷陵守禄	(洞庭郡)	報告	C	県
164	8-1517	倉銜	不明	続食文書	B	諸
165	8-1523(1)	洞庭守繹	遷陵県	追	C	郡
166	8-1523(2)	洞庭仮守繹	遷陵県	追	C	郡
167	8-1524	司空色	(遷陵県)	報告	C	諸
168	8-1525(1)	啓陵郷守意	(遷陵県)	送り状	C	諸

169	8-1525(2)	遷陵守丞配	倉	(1)伝達	C	県
170	8-1527	貳春郷守平	(遷陵県)	農作物不足の報告	B	諸
171	8-1537	都郷守壬	(遷陵県)	爰書	A	諸
172	8-1539	貳春郷守辨	(遷陵県)	送り状	C	諸
173	8-1552	(遷陵県)	尉	召喚	A	県
174	8-1554	都郷守沈	(遷陵県)	爰書	A	諸
175	8-1559	将捕爰飯倉茲	(遷陵県)	送り状	C	諸
176	8-1560	遷陵丞昌	倉嗇夫	徒隸人事	B	県
177	8-1562(1)	啓陵郷趙	(遷陵県)	官吏の非行の報告	A	諸
178	8-1562(2)	啓陵郷趙	(遷陵県)	(1)追	C	諸
179	8-1563(1)	尉守竊	(遷陵県)	食糧支給連絡依頼	A	諸
180	8-1563(2)	遷陵守丞臈之	倉	(1)伝達	C	県
181	8-1565	貳春郷茲	(遷陵県)	送り状	C	諸
182	8-1566	田官守敬	(遷陵県)	送り状	C	諸
183	8-1665	司空昌	(遷陵県)	送り状	C	諸
184	8-1742+1956	貳郷守吾	(遷陵県)	送り状	C	諸
185	8-1743+2015	遷陵拔守丞敦狐	なし	鞠	A	県
186	8-1759	啓陵□	(遷陵県)	送り状	C	諸
187	8-1797	啓郷守恬	(遷陵県)	報告か	C	諸
188	8-2008	司空□	(遷陵県)	送り状	C	諸
189	8-2010	(遷陵県)	尉	差し戻し	A	県
190	8-2011	都郷守是	(遷陵県)	送り状	C	諸
191	8-2034	少内守敵	(遷陵県)	送り状	C	諸
192	8-2035	不明	不明	報告	B	不
193	8-2106	不明	不明	人事	A	不
194	8-2111	不明	(遷陵県)	送り状	C	不
195	8-2121	貳春郷茲	(遷陵県)	報告	C	諸
196	8-2134	不明	不明	送り状	C	不
197	8-2136	司空□	(遷陵県)	送り状	C	諸
198	8-2138	田守武	(遷陵県)	辞	A	諸
199	8-2151	不明	不明	送り状	C	不
200	8-2156	司空	不明	送り状	C	諸
201	8-2161	獲	不明	報告	B	不
202	8-2191	遷陵丞昌	なし	鞠	A	県
203	8-2429	不明	不明	送り状	C	不

最も右の欄は、発信者の別を示し表Ⅱと対応する。「諸」は県内諸官府、「不」は不明。  
同じ内容の追でも類が異なるものがあるが、これはその直前の事例と同一文書内の場合、直前文書の内容によっては、ルーティンワークの続きとしての追と、独自の裁量権による追とに分けられる、と考えたためである。